連載43

ホテル評論家 瀧澤信秋の「イケてる」レジャーホテル探訪



ラグジュアリーホテルからビジネスホテル、カプセルホテル、そしてレジャーホテルと、さまざまな宿泊空間を利用者の視点から「体感」するホテル評論家・瀧澤信秋氏。同氏が実際に利用者として体感した最新のレジャーホテルの「感動」空間、「イチ押し」サービスをレポートする。

PROFILE

日本で数少ない宿泊者・利用者目線のホテル評論家として、テレビやラジオへの出演、雑誌・新聞連載など、多方面で活躍。著書に「365日365ホテル上」(マガジンハウス)、「ホテルに騙されるな! プロが教える絶対失敗しない選び方」(光文社新書)、「ホテル評論家が目腹で泊まる! 最強のホテル100」(イースト・プレス)、「辛口評論家、星野リゾートへ泊まってみた」(光文社新書)など https://sites.google.com/view/hoteltakizawa/

ホテル評論家
瀧澤 信秋氏











ベッセルインなんば（大阪市中央区）

ブティックホテルをコンセプトにする宿泊特化型ホテルのフレキシビリティ

本連載はレジャーホテル業界誌において、ホテル評論家が見たレジャーホテルについてのレポートをテーマにするが、時にレジャーホテル運営に参考になるような一般ホテルの取り組みなども紹介している。取り上げるホテルは一般ホテルでありながら、秀逸なゲスト目線や先取性も感じさせ人気ホテルとなっている施設ばかりである。今回は“ブティックホテル”もコンセプトにする宿泊特化型ホテルである。

訪日客を身近に感じるエリアの筆頭が大阪・ミナミであろう。道頓堀に溢れる外国人旅行者をみるに“ひしめき合う”という表現がまさにマッチするインバウンド活況体感エリアともいえる。有名なグリコの看板ビューを楽しめる道頓堀橋より御堂筋を挟んだ向かい側～千日前通あたりまではレジャーホテルが集中しているが、ビジネスホテルを中心に一般のホテルも散見される。そんな宿泊特化型ホテルで最も御堂筋に面した繁華街にあるのが「ベッセルインなんば」だ。

ベッセルインなんばは、大阪メトロ御堂筋線なんば駅25番出口から徒歩2分、飲食店も集中した多くの人々が行き交う立地にある。ベッセルインなんばから奥へ進み通りを跨ぐとレジャーホテル街に行き着くが、レジャーホテルの論理でいうならばある種の一等地でもあり、宿泊特化型ホテル多様化の論理でいえばハイブリッドな集客も見込める場所といえようか。ハイブリッドな集客とは、すなわち宿泊客の取り込みに加えてデイユース客の需要も視野に入れることを指す。

ベッセルインなんばの客室フロアに出向くと照明は控えめ、デザイン性の高い客室サインも印象的だ。「都会を感じるブティックホテル～THE TIME（CRAFT STYLE）～」をコンセプトとし、クラフト感にもフィーチャーしたインテリアデザイン。そんなブティックホテルテーマであるが、ブティックホテルという呼称に敏感なレジャーホテル関係者は多いのではなかろうか。そもそも国際的にブティックホテルの意味するところは、独創的なデザインやサービススタイルのホテルと認知されてきた。

日本では先んじてレジャーホテル業界で、伝統的なラブホテルからの代替表現模索という過程で用いられてきたワードでもあった。国内おいてブティックホテル=レジャーホテルという表現は、業界内にとどまらず一般にも一定程度認知されてきたが、他方、近年のインバウンド活況・ホテル競合・コンセプト合戦というなかで、上述の国際的な意味におけるブティックホテルも広がりをみせてきた。かようにベッセルインなんばをみるに、ブティックホテルコンセプトはまさに独創的なデザインやコンパクトさという点でもマッチしている。

既に述べたようにベッセルインなんばではデイユースも打ち出す。コロナ禍を契機としてデイユースにも舵を切る一般ホテルは激増したが、ベッセルホテルズではなんばに限らず全国の多くのチェーンホテルで実施し利用率も好評という。もとい、なんばの立地にして親和性の高さ際立つと感じるのは筆者だけであろうか。レジャーホテルにはない利用のしやすさ、明るさ、徹底した清潔感などが支持されているという。

ベッセルインなんば
大阪府大阪市中央区道頓堀2丁目2-18